

「在る」ことから始まる「形なき共同性」
- ジョルジュ・バタイユの思想をてがかりにして

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
白居 弘佳

「生きる意味」や「生きがい」のある人生を送ることが人生の目的として語られることが多い。しかし、病気や人生の転機において、生の「意味」を問うことが困難になった時、人間がただ「在る」とはどういうことなのだろうか。またそうした「在る」者どうしが「共に在る」ことは果たして可能なのだろうか。本論文は、ある脳死状態の人との出会いを起点に、ジョルジュ・バタイユの思想を手がかりにして上記の問いを再考しようとするものである。意味や意義を問う前にただ「在る」ことを肯定し、生きている過程そのものに意味を見いだそうとする地点を考察することは、人の能力や質を選別される手前の地平を開くものとなるのではないだろうか。

第一章では、「在る」こととは何かを、バタイユが「総体性」と呼んだ「生」のあり方を通して考察した。「総体性」とは、超越的な視点から「生」の意味ある「まとまり」を俯瞰することではなく、生の生成的な運動そのもののことである。その運動のさなかに不意にまったく異質な他者と出会う瞬間がある。それは、自身の孤独や混乱を通して互いのヴァルネラヴィリティが触れ合う瞬間でもある。自己と異質な他者との出会いは、「在る」とこと「共に在ること」の始まりとなる。

第二章では、「動物性」と「人間性」に関するバタイユの考察を検討した。社会化するとは、荒々しさや暴力性などを併せ持つ「動物性」を忌避するようになることであり、そうすることで私たちは整然とした人間の世界を獲得する。しかし私たちは、たとえ社会化したとしても「動物性」と「人間性」の「間」でせめぎあう存在であり、その「間」にこそ自分自身が形成してきた世界が崩れる「混乱」とともに、共約不可能な他者との出会いを惹起する契機が潜んでいる。

第三章では、他者と出会ったのち、互いに何を贈与しあうことによって交流することができるのかを、贈与の根源的なイメージとしてバタイユが提示した古代アステカ神話を中心に考察した。贈与をして「役に立ちたい」という思いと「自己を保存する」という二つの欲求は拮抗する。贈与についての考察は、すべてをギブ・アンド・テイクの等価交換でよしとする手前で、私たちにどのような贈与が行えるかの手がかりとなるであろう。

第四章では、以上のような考察を踏まえながら、不意に出会った異質な他者と私たちはどのようなつながり(共同性)が持てるのかについて、モーリス・ブランショとジャン＝リュック・ナンシーによるバタイユの共同体論をもとに考察し、親密圏にとどまるのでもなく、異質な者を同質性に回収するのでもない「形なき共同性」の可能性を模索した。「共に在る」ことのなかで、目的論的に意味を求めるのでもない、後から振り返ったときに意味が生まれているというような地平をこそ私たちは求めるべきなのではないだろうか。